第７４回全道高等学校演劇発表大会 in 小樽「運河きらめくオタルナイ大会」

上演番号４番　北海道函館中部高等学校（道南支部）

「ころろ」 作：丹　通史

この劇は、全体として物静かで人物の心情を深く表現している印象であった。題材となっている夏目漱石の「こころ」を講評委員のほとんどが読んだことがないため分からないところも多々あったが、引き込まれる雰囲気や人物の繊細な心理描写などにより目が離せないシーンが多く、私たちが見たことのない新しい演劇に気付くことができた。登場人物の誰もが際立っており、それぞれの心情の変化も丁寧で多彩なので共感しやすかった。また、登場人物の誰かだけに感情移入するのではなく、各々に少しずつ自分と重なる点があるという意見もあった。敬太が夢を持たない自分と夢を持つ一哉を比べ、劣っている自分に一哉を道ずれにするところに、誰にでもある軽薄さが垣間見られ、心にじわじわとした闇を感じた。

演出では、序盤に幕前で芝居が始まり、巧みな照明により森の中を車で進んでいることが表現されていたり、緞帳が上がった時に狭い世界から広い世界に移るところを下車により表現するなど工夫が見られ分かりやすかった。また、スポットライトなどで人物に目線が行くようにしたり、一気にホリゾントが真っ赤に切り替わる演出も印象的であった。赤いホリゾントになった後、襖にも色が残っていた演出が美しく印象的だったという意見もあった。

夢を捨てたり、見つけたり、応援したり、心がコロコロと変わる場面の中に、人間の葛藤や苦悩が見て取れ奥深さを感じた。最後に敬太が襖を大きく広げるシーンが自分の本当の気持ちや考えをぶつけているように見え、敬太の心情がひしひしと伝わってきた。季里は劇中では、原作「こころ」の中のお嬢さんの立ち位置で、一歩引いた受け身な印象や他のキャストとは異なる人間味があり、話の締めに関わっていると思われた。今日子は季里とは異なり、常に話題の中心には今日子がいた。季里と今日子は対になっており、今日子の女らしさを引き立てる役割が季里であったのではないかという意見もあった。一哉は原作の K であり、K は自分を追い込んで死んで行ったが、この劇では一哉は死なずに向き合って行く選択をしており、原作との違いを感じられて面白かった。原作当時と現代の選択の違いと結末の変化についても考えさせられる作品であった。